

巻頭特集 昔ながらの町並みが続く

歴史深い赤津焼の里

日本六古窯のひとつである瀬戸。1300年にわたり重ねてきた技術は、いま国内にとどまらず世界でも知られています。瀬戸焼の一種、赤津焼で知られる瀬戸市赤津は、歴史を感じられる風景が残っています。



1 喜多窯 霞仙の加藤裕重さんが手掛けた2020年の新作。御深井焼の青雲紋カップ&ソーサー
2 赤津町交差点から北東に伸びる坂を登れば、窯道具のエンゴロを積んだ窯垣が見られる
3 町めぐりの見どころのひとつが窯元である作助の工房。赤津瓦の赤茶けた屋根が残る
4 窯元から伸びる煙突が印象的。道案内版が陶器製だったりと焼物の里の息吹がこちらに

七つの釉薬を使い分ける 殿様が愛した赤津の茶道具

瀬戸市東部の山間、岐阜県美濃にも近い赤津地区。瀬戸の奥座敷と呼ばれるこの場所で作陶されるのが赤津焼です。

平安時代以前から始まっていた赤津の焼物作りが、さらに繁栄を遂げるきっかけは初代尾張藩主徳川義直の存在でした。江戸時代以前に戦乱を逃れ、美濃へと移っていた赤津の陶工を瀬戸に呼び戻し、赤津での開窯を命じたのが義直公。諸説あるも

の、これが赤津焼の始まりといわれます。義直公は尾張徳川家のためのお御用窯を置き、さらに城外にも窯場を設け名古屋城で開く茶会のため茶器を作陶。赤津焼は名古屋城のお庭焼きとも呼ばれました。

地元で採れるコシと粘りのある土、伝統の七釉で仕上げられるのが特徴。御深井（おふけ）、黄瀬戸、古瀬戸、織部、志野、鉄釉、灰釉といった釉薬を使い分け仕上げます。

1977年、「赤津焼」の呼称で通産省認定の伝統的工芸品に指定。赤津焼を代表する御深井を使用したも

のでした。名古屋城の御深井丸に窯が築かれたこと由来する釉薬の名。そこで焼かれたものは御庭焼と呼ばれ、殿様が家臣に与える褒美に使ったとされます。殿様が愛した御深井には品と風格が漂います。

赤津の魅力伝えるため 有志が積極的に全国へPR

瀬戸焼は鎌倉時代、いち早く釉薬を使った焼物を始めたことで知られます。江戸時代後期には磁器の開発に成功したことで、他地区と比較しても珍しい「陶磁器の生産地」として発展を続けてきました。しかし後継者不足や消費低迷の影響を受け、1978年をピークに事業所や従業員数は減少。厳しい状況のなか、赤津焼と赤津地区をPRしようとして、1999年に「喜多窯 霞仙」十二代目で陶芸家の加藤裕重さんら窯元の有志によって立ち上がったのが「赤津窯元まわし会」です。

「購入したいと思っても、窯元と聞く少し緊張をして建物のなかまで入りづらいと感じる人は多いのではないだろうか。霞仙では展示・販売をするギャラリーを併設することで、気軽に赤津焼に触れてもらおうとしています」。

独創的な作品が支持され、海外にも取扱店がある喜多窯 霞仙。茶道具から普段使いの器までをラインナップし、なかでも御深井の焼物がりながら作品を求めて、毎年2000〜3000人の来場者を集めます。今年も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、5月開催を中止。次回は、11月に開催予定です。

「直接、陶芸家と会話を楽しんだり購入ができます。話が盛り上がり、掘り出し物が出てくることも」と加藤さん。遠方へ出向いての展示・販売と異なり、軒先で販売できるため、倉庫の奥に眠る少量の作品も並べやすいといえます。

「焼物に興味をもち赤津地区の空き家を借りて窯元を構える若い世代が、会を発足した約20年前に比べて増えています」と加藤さん。昔ながらの風景だけでなく、新しく始まるカフェなどが点在する赤津のんびりと時間が流れる魅力的な町並みが広がります。



Information
赤津窯元まわし会事務局 瀬戸市赤津町71 喜多窯 霞仙内
0561-82-3255 / www.kamanosatomeguri.com ※5月のイベント「赤津焼の里めぐり」は中止です

代表的です。霞仙には電気、ガスの窯が3つあり釉薬や仕上げの風合いによって使い分けています。1000℃にも達する窯の温度と焼成時間を考慮して、御深井の上品な青色を巧みに表現します。

赤津窯元まわし会に所属する24の窯元のなかには、カフェを併設したり手ごろな焼物を販売したりと、創意工夫を凝らして来訪者をもてなす人たちがいます。ほかに案内看板を設置するなど、赤津全体でのホスピタリティの向上を目指しています。

暮らしに根差した 古き良き焼物のまち

小高い丘を登るような緩やかな斜面、窯元の屋根からまっすぐ伸びる煙突、暮らしの匂いがする小路。民家と窯元が当たり前のように隣り合

う赤津地区は道も決して広くはありませんが、観光地化されていない焼物の里の風景が残ります。

地区の魅力発信しようと、赤津窯元まわし会が年に2回行う「赤津窯の里めぐり」。赤津の窯元をめぐ



完成したばかりの喜多窯 霞仙の焼物



5 作品の展示、販売をする喜多窯 霞仙のギャラリー。器に料理を盛り付けた展示パネルを置くことで、購入後のイメージがしやすい
6 赤津を歩いていると、看板やのぼりを掲げた窯元が目飛び込む
7 ろくろを回し手仕事を見せられる加藤裕重さん。学生や訪日外国人からも人気が高い陶芸体験（開催は土日のみ）も実施
8 焼物作りの最初の工程である菊練り。手のひらの手首に近い部分を使い、土の中の余分な空気を外に出していく

